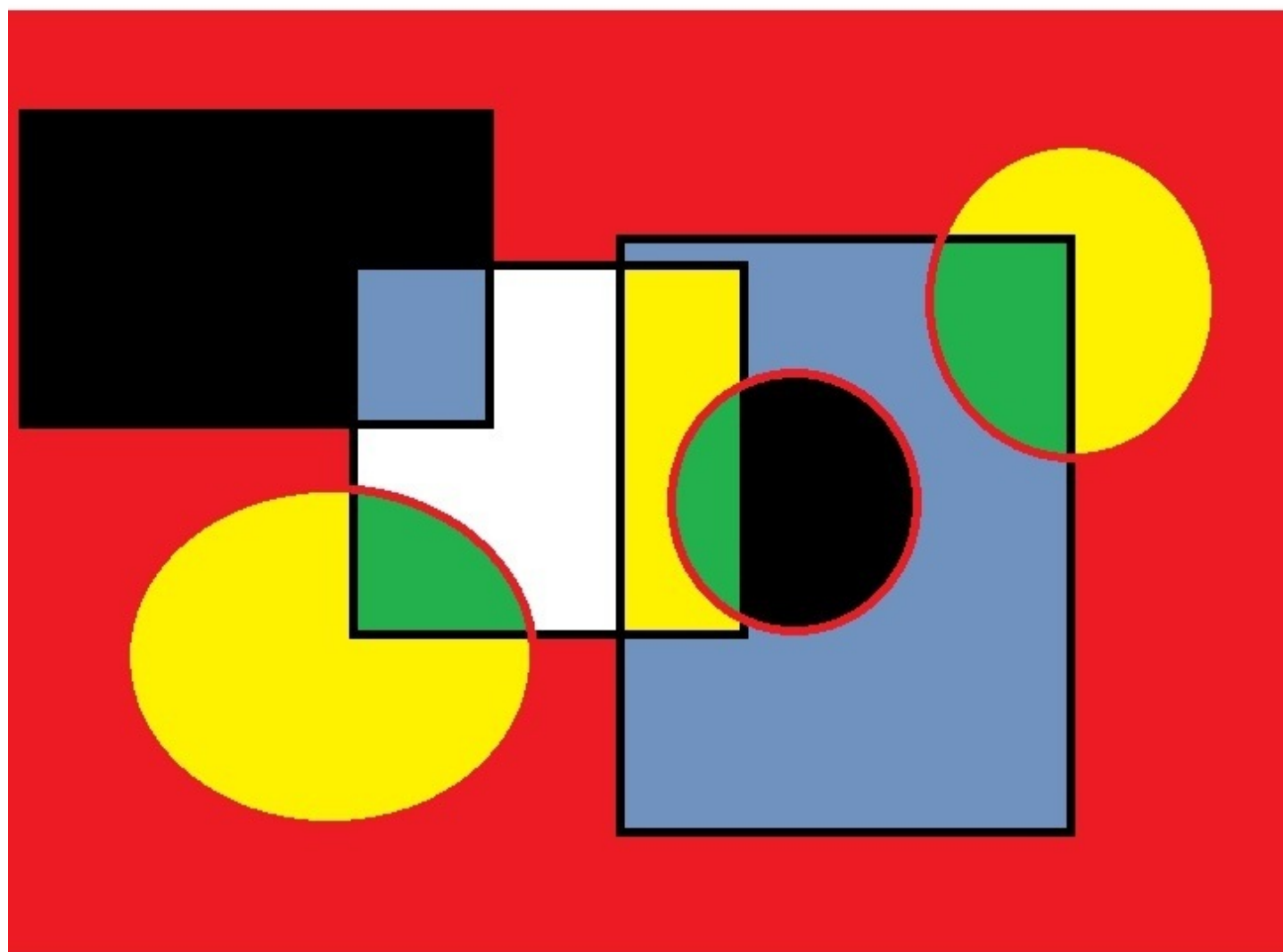


サニーホリデー



N.O

池田は散歩に出かけた。外は天気が高く、絶好の散歩日和で早春の風が心地良かった。

近所の住宅街を抜け、公園通りへ向かってしばらく歩いていると、近所の動物保護団体の男が猟犬を従えて、肩に猟銃を抱えた狩りの格好で歩いていた。従えている猟犬は彼が日頃散歩をする度に、出会う人間に誇らしげに見せていた自慢の猟犬だった。彼は動物保護団体の人間であるため、自然動物を狩りの対象にすることはできない。その代わりに彼が狩りの対象にするのは人間だった。

正確には人間の男を狩りに行くところだった。女性を狩りの対象にすることもできるのだが、それをやると女性団体から狩りの対象にされてしまうので、余程自分の腕に自身のある狩人か、それなりの装備をしていないと、そんなことはできないのだ。

池田がその男に挨拶をすると、狩人は「やあ」と言ってから猟銃の銃口を池田に向けてきた。どうやら狩りの獲物にされてしまったようだ。冷静に考えてみれば、狩りをしている人間に向かって挨拶をするなどは、自分を狩りの獲物にしてくれと言っているようなもので、実に愚かな行為なのだが、まさか近所の住人を狩りの対象にするとは思わなかったので油断をしてしまった。しかし最近には狩人に挨拶などをして逆に罠に誘うという巧妙な方法で狩りをする若者なども増えてきていて、不意に道で挨拶などされるとドキリとしてしまうものだ。

とにかく池田は今、獲物として銃口を向けられているので、これをどうにかして逃げなければ、今夜あたりに夕食として鍋などにされてしまうのである。こんな時などは、人権団体の人間ならば生きる権利を主張して見逃してもらおうのだが、池田はそんな団体に入っていなかったのも、仕方なく金で解決をしようと考えた。

池田は狩人に対して適当な金額を口にして見逃してもらえるように交渉を始めたが、狩人は池田の言う二倍の金額を要求してきた。双方の要求は食い違いを続け、交渉はすぐに決裂してしまった。狩人は池田に向かって発砲してきたが、弾丸ははるか上空を素っ飛んでいった。どうやらこの狩人は銃の扱いは下手なようで、池田は狩人がもたもたと猟銃に新しい弾丸を装填している間に走って逃げていった。その間に狩人の自慢の猟犬は、近所の老婦人に連れられて散歩をしていた他のメス犬と交尾をしていた。

狩人は後から猟銃を乱射しながら後を追いかけてきたが、弾丸が通りにある家の窓ガラスを割ってしまい、怒った住人が狩人を最新式の狙撃用ライフルで撃ち殺してしまった。池田は助かったお礼に家の住人にいくらかの金を渡してガラスの修理代にしてもらった。

池田がさらに散歩を続けていると、キャッチセールスの男が話しかけてきた。

「すみません、少しお時間よろしいですか」

池田は暇だったので少しだけならと話を聞いてやることにした。二人で近くの喫茶店に入ると、セールスマンは銀色のアタッシュケースからいくつかのパンフレットを池田に見せながら、細かい商品の説明を始めた。

「我社の奴隷はいずれも若くて健康、そしてなにより従順なのをそろえております。さらに今な

ら奴隷一人をお買い上げにつき、もれなく高純度のヘロイン三グラムのプレゼントが付いております。これは来週までのサービスとなっておりますので、今が大変お得ですよ。どうですか、この機会に我社の奴隷を一人お買い求めになつては」

「うーん」

「こちらの奴隷などはまだ生後数ヶ月の乳児なので、今から育てればお客様のお好みの奴隷に仕上げることができます」

「でもな」

「お支払いの方はカードやローンのご利用も可能ですし、もし古くなった奴隷などがおりましたら、その下取りの方もやっておりますよ」

「そうですか」

池田はこういったセールスの類いを断るのが苦手で、先日も暗殺のセールスマンに捕まって三人の暗殺を二人分の料金でという言葉に押し切られて、仕方なく会社の上司を三人殺してもらう羽目になった。三人の内一人は可愛がってもらっていた上司だったので、心苦しかったが、一度その暗殺会社に依頼すれば他人が暗殺を依頼しても自分がその会社から暗殺されることはないというサービスに惹かれて金を出してしまった。

結局、池田は奴隷を一人買わせる羽目になり、女の奴隷をカードで買うことにした。セールスマンが携帯電話で奴隷を持って来るように仲間に電話をすると、「美しい女奴隷を格安で」と言っていたのだが、いざ現れた女奴隷はおそろしい程に醜いモアイ像のような顔をして、着ている白いワンピースがどう見ても死装束にしか見えない程に不健康そうにガリガリに痩せていた。

池田は文句を言ってやろうかと思ったが、その女奴隷を乗せてきた軽バンの運転手が、人相の悪い目つきで丸太のような腕を窓から出し、何か文句を言おうものならただではおかないと言いたそうに周囲を睨みつけていた。池田が諦めて女奴隷を受け取ると、セールスマンは挨拶もせずその軽バンに乗ってどこかへ去ってしまった。

池田は受け取ったばかりの女奴隷を引き連れて喫茶店を出ることにしたが、池田はセールスマンのコーヒー代まで支払うことになっていた。

池田は女奴隷の首輪につながれたロープを引っ張りながら、厄介な荷物を抱えてしまったなど憂鬱な気分で、海岸の方へと向かって散歩を続けていた。女奴隷は時折首輪がきつくて苦しいのか、小さな呻き声ともいえない声を出しては首と首輪の間に必死に指をねじ込もうとしながら、虚ろな目で池田の背中を見つめて歩いていた。

池田は今までに奴隷など持ったことがないので、どのように扱えば良いのか分からず、これから餌代などの出費を考えると頭が痛くなる思いだった。せめてもっと美人かそれでも、もっと明るく健康そうな女であれば、どれほど違う気分でこの道を歩いていたかと思いながら女奴隷の顔をちらりと見てやった。

この女奴隷ときたらモアイのようなでかい顔が末期ガンの患者のように青白く、長い髪がだらりとたれてその隙間から見えている虚ろな目が、呪いでもかけられそうな不気味な雰囲気漂わせていた。池田はせめて話でもして、この不気味な女奴隷と少しは親しんでみようと思いつけて

みた。

「お前はいつから奴隷になんてなったんだ。親の代からの奴隷なのか」

女奴隷は髪の間から池田の顔を覗き込んでから、紫色の唇を動かして力の無い声で返事をした。

「はい、私の両親もさらにその両親も奴隷でした。私は生まれてから一度も自由人としての生活を経験したことはありません」

「さてよ、奴隷といっても昔と違って月に二万くらいの餌代が貰えるだろう。それをきちんと貯めていけば、お前の親の代はともかく、お前は自分の所有権を買い戻して解放奴隷になれたんじゃないのか」

「ご主人さまは人がよろしいですね。奴隷所有者たちが、二十年前に出来た奴隷所有法に従って本当に餌代を払っていると思っているんですか。ほとんどの奴隷所有者たちは奴隷に餌代なんて払っていませんよ。奴隷には裁判を起こす権利も不当な扱いを訴える機関も存在しないんですからね」

池田は女奴隷の言葉をにわかに信じがたかったが、事実なら酷い話だと思う反面、自分も餌代を払う必要はなさそうだと思って安心した。

「労働基準管理局には確か奴隷用の窓口があったと思うんだけどな。あそこに行っても相手をしてもらえないのかい」

女奴隷はうんざりしたような表情をしたつもりなのだろうが、始めから幸薄い顔をしているせいか池田には伝わらず、逆に池田は女奴隷の鼻から鼻毛が数本出ていることに目が止まってしまい、話を聞くのも上の空になっていた。

「あんなところの人間なんて話すだけ無駄ですよ。そもそも役人なんて市民のことなんて考えている人はいないんですから。もっとも私は市民ですらないんですから」

「そうか、それなら俺もお前には餌代を払わないつもりだが、それでもいいな」

「はい、始めから期待なんてしてませんよ」

池田と女奴隷は海岸に着くと海岸通りをぶらぶらと歩いていた。天気が良いせいか意外と人が多く、家族連れや恋人たちが砂浜で戯れ合っていた。中には砂浜で性交に及んでいるカップルなどもいて、それを撮影している盗撮マニアがいるかと思えば、さらにそれを指差して笑っている子供たちなどもいて、静かな海を眺めに来たつもりが海岸は少々賑やかになっていた。池田は女奴隷の首輪のロープを引っ張りながら騒音に邪魔されながら波の音を聞いていた。

「そうだ、お前をなんて呼べばいいかな。名前は」

女奴隷はため息をつくようにしながら答えた。しかし池田は女奴隷の息が臭いことが気になってしまい、また上の空になりかけていた。

「そうですね、ケイコと呼ばれていたこともありますし、タコデビルと呼ばれていたこともあります。お好きなように呼びください」

池田はそう言われると困ってしまったが、どんな名前にしてやろうかと思案するのは嫌いではなかった。子供の頃は親がペットとして犬や猫を買ってくると、必ず自分が名前をつけていた。

「お好きなようにと言われると悩んでしまうが、良い名前がある。リリだ、リリにしよう。昨年

に死んだ猫の名前だ」

リリという死んだ猫の名前をつけられた女奴隷は、嬉しくもなさそうに下を向いたまま小さな声で返事をしたのみだった。

「おいリリ、今から一緒に穴を掘るぞ。しっかり手伝えよ」

そう言うと池田は足元の砂を素手で掘り出し始めた。リリも青白く細い腕で池田の掘り出した砂を運んだりして手伝っていた。しばらくすると、人間が屈んで入り込めるくらいの穴ができていた。池田は汗を拭いながら、同じく砂にまみれて汗をかいていたリリに目を向けた。

「よし、この中に入っていいぞ。俺が上から砂で埋めてやるからな。昔はこんな遊びをしただろう。懐かしいな」

リリは池田に言われるままに砂の上に入り込んでいくと、池田はその上からザクザクと砂を放り込んでいった。ようやくリリの首から上を残して体の全てを埋め終わると、池田は額の汗を腕で拭いながら立ち上がり、リリを見下ろした。

「どうだ、動けるか」

リリは少し顔を歪ませて体をねじったりしているようだったが、ほとんど動けない状態になっていた。池田は子供たちを呼び寄せて、リリの頭をスイカに見立ててスイカ割りなどをして楽しんでいた。

子供たちが夕方テレビのポルノショーを見なければならぬからと言って帰っていくと、池田は海の方へ視線を向けた。気がつくやうに、二人が海岸に来てから波打ち際はかなり陸の方へ進んでいた。もうしばらくすれば、リリが埋まっている砂浜も海水に沈んでしまいそうだった。実際、満潮になると、この海岸はリリが埋まっているところなどは、海のはるか底に沈んでしまう。

池田はリリに背を向けるとそのまま振り向かずに海岸から立ち去っていった。リリの顔は海の方へ向けられていたので、池田の後ろ姿を見ることもできなかったが、リリは気配で池田が去っていくのが分かった。リリは騒いだり喚いたりすることもなく、砂の中に体を埋められたまま、満潮の来る時を待つだけだった。

池田は海岸通りからタクシーに乗り込むと、酒を飲みたくなり行きつけの店の名を運転手に告げた。酒を飲むにはまだ少し早い時間だったが、店が込んでしまう前の人の少ない静かな状態が池田は好きだった。

タクシーが店の前に着くと、池田は金を払ってタクシーから降りたのだが、タクシー代で酒を飲む金が無くなってしまった。仕方なく池田は運転手に持っていた三グラムのヘロインの内の一グラム程度を渡して金を返してもらった。運転手は貰ったヘロインをその場で使用するとすぐに車を発進させたが、二十メートルほど先でレストランに突っ込んでいった。池田はその時にはすでに店の中に入っていたので、そんなことは知らなかった。

店は思った通りに人が少なく静かだった。池田は安心して店内に入っていくと店の主人でもあるエリコが池田を見つけて声をかけてきた。

「あら、池田さんいらっしゃい。今日は休みだったの？」

このまだ十二歳の少女でありながら店を仕切っているエリコは、いつも愛嬌のある笑顔で挨拶をしてくれる。だがその表情はやはり十二歳で店を経営するほどの女であるだけに、妙な色気のようなものを発していた。

この店はホステスが全員十二歳以下という無茶なクラブで、始めは変態ジジイばかりが来るロリコンパブかと思っていたが、一度だけ試しにと友人に誘われて入ってみると、年齢こそ十二歳以下しかいないが、知能指数は百五十以下はいないという超天才を集めた天才パブだったのだ。会話はもちろん子供らしいアニメやゲームの話もできるのだが、政治経済から宗教哲学までどんな話をしてもついてくることができる。友人に誘われて何度か来るようになっていたのだが、驚くほどに高レベルな会話を十歳前後の少女たちが平然とこなしている姿が不気味で、最初はどうも楽しさを理解することができなかった。ところがアンという十一歳の少女を知ってからは、一人でも月に何度か来るようになってしまった。

アンは細い体に白い肌が絹のように光り、長く美しい黒髪を持った池田好みの少女だった。他の少女たちはやはり天才とはいえ少女らしいあどけなさや無邪気さを備えていたが、アンだけは笑顔のときでも、その中にどこか暗さと寂しさのようなものが漂い、そこが他の客には毛嫌いされることもあったが、池田だけはそこに興味を持った。

アンは他の少女たちのように子供であることを武器にしようとはせず、無理に大人びた態度をする癖があった。店の中でも他の少女たちとはあまり馴染んではないようで、ぶらりと池田が店を訪れると一人で店の隅っこに座っているようなこともあった。

池田が店内を見渡すと、時間もまだ早いせい客はまばらで池田がエリコに案内された席に座るとすぐにエリコはいつも通りにアンを呼んでくれた。

「池田さんいらっしゃい」

アンは裾の短い赤いワンピースに身を包んで、派手過ぎない化粧をした顔を笑顔にして立っていた。アンは池田の横に座るとすぐに水割りを作って乾杯をした。それから先はいつも同じで自

分から話をしようとはしない。アンは馴染みの客であるはずの池田に対してさえも自分のスタイルを崩さずに、何か相手が話を始めるのをただ待っているのだ。何も話をしなければ、いつまでも黙って、ただ水割りを作ったり煙草に火をつけたりするだけだった。

それが他の客がアンを嫌がる原因の一つでもあったのだが、池田はそんなアンが気に入っていた。他のホステスのように黙っていると不機嫌になったり、妙に愛想を振りまいてくるようなところが無いのが池田にとっては落ち着くことができ良かった。そして何よりもアンが見せることのない闇の部分を見てみたいと思っていた。

「今日は散歩の途中でね、つい寄ってしまったよ。元気にしてたかい」

アンは池田が話しかけてからやっと池田の方を見て自然な笑顔を見せた。

「池田さんだけね、いつもこうやって私の相手をしてもらっても不機嫌にならないのは。私がここをクビにならないのは池田さんのおかげかもね。感謝してる」

アンは子供の声でありながら、疲れきった老婆のような重みを感じさせる話し方で、ほとんど水しか入っていない水割りを口に運んだ。池田が煙草を口にくわえると、アンは慣れた手つきで細長いライターで池田の煙草に火をつけた。池田はアンの作ってくれた水割りを口に含むと、アンに口づけをして水割りをアンの口に流し込んだ。アンは口移しにされた水割りを飲み込むと、自分も細長い煙草を取り出してくわえた。

「池田さん、最近はお仕事はどうなの？」

池田は煙草の煙をふうと吐き出した。

「仕事の話なんて勘弁してくれよ。この不景気だからね。どこも大変だよ」

池田は話をしながら他のテーブルを覗くと、客とエリコがソファの上で下半身をむき出しにして汗をかいていた。

池田は自分が欲情しているのを感じるとアンの肩に手をまわしたが、アンは埃でも払うように左手で池田の腕を振り解くと、右手で煙草の火を灰皿でもみ消した。アンはいつもこうなのだ。池田だけでなく、アンは決して誰にも体は売らない。

「駄目よ、そういうことはエリコさんかミミちゃんにしてね。それに私は今日はアノ日だから」

アンにはまだ初潮も来ていないのは明らかだったが、アンはいつもこれを口実に使っているようだった。客もこの店の少女たちは大人の女性として扱うのが暗黙のルールになっているので、誰も深追いはしない。池田はいつものやりとりをただ楽しんでいるだけなのだ。

本当にアンとセックスがしたければ、整形売春宿にアンの写真を持っていけば、アンの顔と体に整形した女をすぐに用意してもらえる。最近は髪の毛一本持って行けば、クローンを作ってくれるクローン売春宿というのもあるらしく、時間はかかるが、その方が本物を抱いている気分になれるとあって人気があるそうで、人気アイドルの髪の毛がネットオークションで高値で取引されるようになったのはそれが原因らしい。

「そういえば最近は趣味のハンティングはどうなんだい。この前は警官を罠で仕留めたとか言ってたけど、あれ以来はやってないのかい」

池田はアンの唯一の趣味であるらしい狩りの話を切り出した。アンは狩りの話だけは好きで、新しい銃や罠をかうとすぐに池田に嬉しそうに話をしてくれる。

「あれは警官だと思ったら、ただのコスプレマニアだったって言ったでしょ。実はあれ以来ハ

ンティングはしていないのよ。でも昨日ガンショップに行ったら新しいショットガンを見つけちゃって、つい衝動買いしちゃったの。だから今にもハンティングに行きたくて」

アンに今日危うく狩人に狩られそうになった話をすると、自分ならモーションセンサー爆弾を使って仕留めるわ、と嬉しそうに話をしてくれた。

池田は二時間ばかりアンとの会話を楽しんだ後に店を出た。軽く酔った体に涼しい風が気持ち良かった。池田はポケットに手を突っ込むと、金はもう一銭も無くなっていた。池田はタクシーで帰りたかったのだが、仕方なく歩いて帰るつもりで歩き始めていた。歩き疲れてうんざりしていたところに、丁度良く犬の散歩をしていた老人に、残っていたヘロインを相場の五倍の値段で売りつけて現金を手に入れた。タクシー代にするつもりが、金が入るともう少し遊びたくなり近くのゲームセンターに向かった。

地上二十五階建ての大型ゲームセンターの店内は学校帰りの学生が多く騒がしかったが、池田はさほど気にすることもなく一番好きな銃のゲームに向かった。

池田は現れる人間をライフルで無差別に撃ちまくるというこのゲームでは誰にも負けない自信があったが、池田の築き上げたハイスコアが何者かによって塗り替えられていた。池田はそのことに驚きと同時に悔しさを感じ、そのゲームを一時間近くもやり続けたが、そのスコアを抜くことができなかった。池田が諦めてゲームを止めようとする、背後から若者の声が出た。

「無理無理、おじさんじゃ僕のスコアは超えられないよ。もっと高得点の女と子供を効率良く狙わなきゃ」

池田が振り向くと、眼鏡をかけて長髪でガリガリに痩せた制服姿の高校生らしき男が、にやけながら池田を見ていた。どうやらこの高校生が池田のハイスコアを塗り替えていたようで、池田はつかっとなってゲームのライフルを握り直すと、銃口を高校生に向けた。引き金を引くと高校生は額から血を噴出しながら崩れるように倒れてしまった。ゲームの画面を見ると五十点と表示されていた。池田はさらに店内にいる客も店員も関係なく銃を乱射すると、店内はあっという間に血塗れの惨状となった。池田は女子供を効率良く狙ったせい、高校生に塗り替えられていたハイスコアを二千点も超えることができた。

「こんな裏ワザがあったんだな。お前でも知らなかっただろう」

池田は最初に射殺した高校生の死体に向かって得意そうに話した。

池田は気分良くゲームセンターを出て行くと、もっと大人の遊びがしたくなりギャンブルをすることにした。池田は真っ先に一番近くにある闘技場に向かった。ギャンブルといえば競馬、競輪、カジノ、麻雀など色々あるが、池田は競人が一番好きだった。古代ローマからヒントを得たこのギャンブルは、数人の男たちや猛獣を闘技場の中に放り込んで誰が最後まで生き残るかを賭ける現代人気ナンバーワンのギャンブルだ。池田は闘技新聞を買ってから闘技場の中に入ると、次のレースまでまだ時間があったのでじっくりと予想をすることができた。

池田はエントリーされている十人の中で、まず本命と思われる元凶悪犯のホセルイスを買おうかと思ったが、オッズを見てがっかりすると剣道三段の後藤と穴狙いで元プログラマーの小山田の二点買いにした。

「まもなく本日のメインレース、第三十五回武蔵記念グレードスリーの投票締め切りを行います

」

放送が流れると客は急ぐように客席に流れ込んでいった。池田も売店でビールを買ってから二階席に上がると、良く見える席を確保することができた。選手たちの入場が始まると、フィールドに現れた選手たちに声援を送った。

「おらー、後藤かましたれよー」

エントリーナンバー一番、元漁師、西郷宗一郎。エントリーナンバー二番・・・」

選手の入場と共に場内アナウンスによる選手の紹介が始まった。選手が一人一人紹介される度に場内から大きな声援が送られたが、元プログラマーの小山田のときだけは、やや声援が小さかったのが池田は気になった。やはりホセリスの人気は絶大で、一番の歓声にホセリス自身も満足そうに手を振って観客に応えていた。

選手の紹介が終わると、選手たちはそれぞれに武器を持って自分のゲートに向かっていった。一番人気のホセリスはチェーンソーのエンジンを唸らせながら、観客の声援を煽っていた。池田の買った後藤は刀を光らせながら精神を集中しているようだったが、穴狙いで買った元プログラマー小山田はなぜか両手でコードの付いたマウスを振り回していた。

どーんとスタートの大砲が打ち鳴らされると、フィールドの四方にあるゲートが開き人工芝のフィールドに選手が一斉に流れ込んでいった。ホセリスがいきなり二人をチェーンソーで血祭りに上げると、客席が一気に盛り上がった。元漁師の西郷が投網を巧みに使ってホセリスを追い詰めると、番狂わせの予感にさらに盛り上がったが、最後はチェーンソーで網をズタズタにされてしまい、あっけなく西郷はやられてしまった。

ホセリスの強さはやはり圧倒的で、本命を買っておくべきだったかと池田も後悔をし始めた時、ホセリスのチェーンソーのエンジンが突然止まってしまった。ホセリスは慌ててエンジンを再び始動させようとしていたが、完全に故障してしまっただった。ホセリスは仕方なくチェーンソーを諦めて素手になって敵に向かっていった。

そこがチャンスだと思ったのか、それまで完全に試合放棄気味に逃げ回っていた小山田がマウスを振り回しながらホセリスに向かっていった。大穴のチャンスに池田も興奮したが、一瞬でホセリスにマウスを奪われた上にそのコードで首を絞められてやられてしまった。立ち上がっていた池田もがっかりして席に座ろうとした瞬間、その隙を突いて後藤が後ろからホセリスを肩から袈裟斬りにしてしまった。大本命の意外な敗北に場内がどよめいたが、池田は額に汗を流しながら後藤に声援を送っていた。レースは見事に後藤が最後まで生き残り、後藤も手を振って観客の声援に応えていた。池田は自らの予想が的中したことに満足した。池田は換金所で配当金を受け取ると、大きく膨れ上がった自分の財布にさらに満足した。

池田は少し歩きたかったので、家の少し手前でタクシーから降りた。

「釣りはいらぬよ」

すっかり暗くなって人通りも全くない住宅街を池田は一人で家までの二百メートル程の距離を歩いていた。

池田は勝った金で酒を飲み直し、女を抱いて気分良く夜の冷たい風で自分の体を冷ましながらか女の肉体の感触を思い出して余韻に浸っていた。静まり返った道路に池田の鼻歌と足音だけが響

いていた。

しかし次の瞬間、暗闇の静寂を突き破るように甲高い爆発音が数回響いた。池田は右腕に衝撃を感じて左手で触ってみると、血がどくどくと流れ出していた。暗闇の中に数人の男たちの気配をようやく感じ取ると、池田は舌打ちをしながら走り出した。

「こんな時間に狩りなんぞしやがって」

狩人たちは獲物を仕留めそこなったことを知ると、池田を追いかけながらライフルを乱射した。家まであと数十メートルというところで池田のすぐ横で凄まじい爆発が起こり、池田の体は爆風に吹き飛ばされ激しく地面に叩きつけられた。

小型モーションセンサー爆弾だった。池田の右目は焼け爛れて見えなくなり、右腕は吹き飛ばされて肘から先が無くなっていた。池田はなんとか地面を這いつくばりながら家まで逃げようとしたが、まもなくショットガンで頭を吹き飛ばされてしまった。

「まったくお前のやり方だと、後で鍋にする時に料理がやりにくいんだよ」

狩人の一人が仲間の一人に声をかけると、その声に応じて最新型のショットガンを持った少女が暗闇の中で微笑んだ。

「だってこの方が気持ち良いんだもん。それに私は鍋ってあまり好きじゃないから料理のことなんて考えないしね」

「まあアンのおかげでいつも狩りはうまくいってるから感謝してるけどな。それに今日の獲物はえらい大金を持ってやがった。思わぬ収穫もあったから今日は鍋が美味しく食べられそうだよ」

狩人たちは慣れた手つきで素早く池田の体をバラバラにしてしまうと、それぞれが持っていたビニール袋に入れてからバッグにしまいこんだ。さらに池田のポケットに入っていた財布から金を抜き取ると、煙草をくわえて旨そうに煙を吐き出して笑顔を見せていた。

「そういえばこの獲物、今日来てた客に似てたのよね」

アンは獲物を仕留めた新しいショットガンを撫でながら、アスファルトの上に残った大量の血液を眺めた。狩人の一人は苦笑いを浮かべながらアンの横に立って、同じようにアスファルトを見つめた。

「まったくお前は客だろうが何だろうが獲物にしちまうんだからな。本物の狩人だよ」

アンは嬉しそうな笑顔で仲間の腕を肘で突いた。

「ハンターて呼んでよね。いいのよ。どうせチップもはずまないケチな客だったんだから。それにこんな大金持ってたなんて、さらに頭にきちゃうわ」

狩人たちは暗闇に笑い声と鼻歌を響かせながら消えていった。

終

サニーホリデー

<http://p.booklog.jp/book/34098>

著者：N.O

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/noofoo/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/34098>

ブックログのpapier本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/34098>

Twitter

http://twitter.com/nao_ond

電子書籍プラットフォーム：ブックログのpapier（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社paperboy&co.